

## 「アイヌ語地名を考える(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

北海道の地名は、大部分はアイヌ語に由来する。大別すると5種類のタイプがある。

- ①アイヌ語の音を、そのままカタカナ表記した地名。  
(例) ポンノウシ (ポン・ニウシ「小さな森」)
- ②アイヌ語の音に、漢字を充てた地名。  
(例) 登別 (ヌプル・ペツ「濃い色の川」)
- ③上記で読み方を変えてしまった地名。  
(例) 月寒 (トゥ・ケシ・サブ「丘のはずれの下り坂」  
→ ツキサップ → ツキサム (月寒))
- ④アイヌ語の地名の意味を、日本語に訳した地名。  
(例) 滝川 (ソーラプチ・ペツ「滝のある川」→滝川)
- ⑤アイヌ語の音とも語義とも関係ない地名に変更。  
(例) 石狩々布 → 旭山 → 廃村で消滅。

圧倒的に多いのが、②のタイプである。奇想天外な難読地名も多いが、その中でも釧路町(釧路市の東隣)の「地嵐別」と「知方学」は別格である。それぞれ「ちゃらしべつ」「ちっぽまない」と読む。難読地名というより「判読不可地名」と言ったほうが良い。



「知方学付近の地形図」学校の記号は、知方学小学校。私は友人との北海道旅行で、この地を訪れたことがある。実に小学校以外、何もなかった。



アイヌ語由来の地名の特徴は、地勢や地形、その土地の暮らしの特徴に、非常に忠実で、例外がない・・・ということである。釧路町の「地方学」も「チプ・オマ・ナイ」(小舟のある川)という意味である。従って「ちっぽまない」と読むからこそ、意味のある地名であって、「ちほうがく」などと読みを変えたら、価値は0になる。前述の「つきさっぷ」を「つきさむ」にしてしまったのは、誠に残念なことだと思う。



絵は「地嵐別(チャラシベツ)の風景」である。ここにも何もなかった。本来のアイヌ語では「シヤラシ・ペツ」(岩を流れる川)といった意味で、嵐とは何も関係がない。しかし地嵐別という漢字からは、道東の強風が吹く荒涼とした風景が思い浮かぶ。地図をたよりにこの地も訪れた。まさしく想像した通りの強風吹きすさぶ集落だった。

私がかんひかれるアイヌ語地名の一つに「石狩々布」(いしかりかりっぷ)というのがある。しかし、長く探し出せなかった。最近、とうとう古い地形図にその地名を発見した。(つづく)